



2008(平成20)年12月8日(月)発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: eces-manage@ecesj.com HP:http://www.ecesj.com/

〔発行者〕 応用生態工学会(編集責任者:幹事長 江崎保男, 事務局長 奥村興平)

Contents

1	はじめに	1
2	第12回総会報告	1
3	理事会・幹事会報告	2
1)	1) 理事	2
2)	2) 幹事会	3
4	ELR2008福岡報告	3
5	行事報告	7
1)	1) 2008札幌セミナー	7
2)	2) 第6回日韓河川生態セミナー	10
3)	3) ICHE2008	13
6	これからの行事案内	16
7	編集後記:事務局から	16

1 はじめに

今回のニュースレターは、目次にあるとおり平成20年9月に福岡大学で併せて開催した第12回総会やELR2008福岡などの報告が盛りだくさんです。大盛況であった初めての三学会合同大会の様子、例年実施している札幌セミナーや日韓合同セミナー、名古屋での水文学・水工学に関する国際会議などについて臨場感のある報告を載せました。学会の更なる発展のため運営状況および方針が検討された総会報告と併せてお読み下さい。

2 第12回総会報告

応用生態工学会では、平成20年9月21日(日)13:00~13:40に第12回総会を開催しました。まず冒頭で、福岡大学山崎惟義氏が総会議長に選出され、議事進行が行われました。以下に主要事項の報告を行います。

1) 報告事項

平成19年度の一般経過、会員状況、総会・理事会・幹事会・委員会、会誌編集状況などについての報告が江崎幹事長から報告され承認されました。

2) 決議事項

平成19年度の事業報告と決算報告が江崎幹事長から、監査報告が中村監事から行われ承認されました。続いて2008(平成20)年度と2009(平成21)年度の事業計画および予算案について提案があり、原案どおり可決されました。また、「現在の会長と副会長の公選と同様に理事、監事を公選にする。」とする規約の改正が提案、説明され、下記のとおり可決されました。

<改正条項:アンダーラインが改正箇所>

(理事)

第11条 理事は正会員の中から総会において選出される。

2 理事の任期は選出されてから、次の改選期までとする。ただし、再任は連続二期までとする。

3 理事の改選は2年ごとに行う。

4 理事は理事会を構成し、会務執行のために必要な事項を議決する。

(幹事)

第12条 幹事長と幹事は理事会の推薦により総会において正会員の中から選出される。

2 幹事長と幹事の任期は選出された日から次の改選期までとする。ただし、再任はそれぞれについて連続二期までとする。

3 幹事長と幹事の改選は2年毎に行う。

4 幹事長と幹事は幹事会を構成し、会務執行のために必要な事項を検討する。

5 副幹事長は幹事会の推薦により、会長が任命する。

(監事)

第13条 監事は総会において選出される。

2 監事の任期は選出された日から次の改選期までとする。ただし、再任は妨げない。3 監事の改選は2年毎に行う。

4 監事は本会の会計および会務執行の状況を監査する。

第5章 会議

(総会)

第14条 総会は正会員により構成され、次の事項を議決する。

(1) 事業計画及び事業報告

(2) 予算、決算

(3) 役員を選出

(4) 規約の改正

(5) その他理事会で必要と認められた事項

3 理事会・幹事会報告

1) 第43回理事会

平成20年9月21日(日) 11:00~12:45

福岡大学文系センター第7会議室

[議事内容]

<1> 第12回 総会資料

(1) 報告事項

平成19年度および平成20年8月までの一般経過、会員状況、総会・理事会・幹事会・委員会の状況と平成19年度事業活動を報告した。

(2) 検討事項

- 平成19年度決算に関して、地域行事は原則として、収入と支出が合うように留意が必要である。また、次年度の会費請求は年度末までに納入できるように2月に発送する。

- 平成20年度および平成21年度事業計画、予算案は原案どおり承認された。

- 規約改正(役員改選)は、規約第17条の「委員会」で対応でき、規約改正の必要がないこと、新たな委員会として「次期役員募集・推薦委員会」を立ちあげること、および「次期役員募集・推薦委員会規程」が承認された。(ニュースレター一次号に「規程」を掲載予定)

また、今後、各種委員会の規程などを作成することになった。

<2> 第13回(平成21年度)大会について

平成21年9月25(金)~27日(日)、埼玉会館(さいたま市)で開催することとなった。

浅枝隆実行委員長を中心に公開シンポジウムのテーマを決めて、11月末締切の平成21年度河川整備基金助成事業の申請を行う。

<3> 委員会活動報告

(1) 編集委員会

査読期間を従来の2ヶ月から1ヶ月にするため次のシステムが提案され、了承された。

- 査読候補者に、最初に1ヶ月以内での査読可否を確認し、可能の場合、査読を依頼する。
- 1ヶ月で査読が返ってこない場合、編集委員長が査読者に連絡し、催促する。
- 催促しても未返信の場合、査読者を替えることを宣言し、新しい査読者に依頼する。

(2) LEEの報告

- 2011年より、LEEにインパクトファクターがつくことになった。国際誌としては異例の速

さで、今後引用してもらえらる質の高い内容にしていきたいとの報告があった。

- 平成20年11月より、投稿はHPから行うことになった。

- 今後、ICLEEの情報は応用生態工学会のアドレスをICLEEに載せ、学会員は、直接、ICLEEの情報を見るようにしたいとの提案があり、承認された。

(3) 交流委員会

- 海外派遣は、助成を15万円にして募集する。
- 日韓合同セミナーは、今年第6回を行い、終了とし、その成果をLEEで特集号として掲載する。
- 今後、応用生態工学会の大会で英語セッションを行うこととし、もし、東アジアのセッションができるならば、韓国側の参加も想定される。

(4) 普及委員会

地域研究会“福井”の発足と福井から普及委員の参画の申出が承認された。

(5) パートナシップ委員会

次年度のさいたま大会では、パートナーシップ分科会を企画することを報告した。

(6) 情報サービス委員会

中村理事からHPについて、次の意見・提案が出された。

- 学会のHPは、一方的に情報を発信するシステムでよい。会員同士の情報交換の場にするると、HPとして管理が困難になる。
- 学会のHPは、最新の情報が掲載されているかがポイントであり、2週間に1回、更新するくらいのペースが望ましい。
- その責任者は、情報サービス委員長とし、幹事長、事務局長は写しで把握しておくようにする。

<4> 委員の新任などについて

以下の新任、交代等が承認された。

- ① 編集委員の新任: 西浩司委員(いであ株)
- ② 交流委員の交代: 中村圭吾委員の異動に伴い、吉村千洋委員(岐阜大)の新任
- ③ 情報サービス委員の交代: 中村圭吾委員の異動に伴い、山田浩之委員(北海道大)の新任
- ④ 普及委員の新任: 福井 高嶋義和(ジビル調査設計株技術1部)の新任
- ⑤ 地域の研究会立ち上げの申請: 応用生態工学会“福井”責任者(森田弘樹株サンワコン環境技術部)

2) 第35回幹事会(各委員長参加)

平成20年9月20日(土) 11:30-12:30

福岡大学文系センター第1会議室

[議事内容]

第12回総会資料, 第13回(平成21年度)大会および委員の新任などに関する検討結果は前述の理事会報告を参照ください。

以下に, 各委員長から報告された主な委員会活動を記した。

(1) 編集委員会

- ・校閲期間短縮のため, 現行の校閲期間2ヶ月を短縮(30~40日)する。

- ・J-STAGEへの会誌登載は7月10日から開始, 電子投稿システム利用は早くて来年度となる。

(2) 普及委員会

- ・地域研究会として“四国”(仮称)に加えて“福井”発足と普及委員新任の申出があった。

- ・ポスターは引用写真やデザインについてさらなる検討を行なう。

(3) 交流委員会

前述の理事会報告参照

(4) パートナリシップ委員会

- ・第11回大会でのパートナーシップ分科会は評価が高かった。平成21年度大会ではパートナーシップ委員会が関与する行事を考える。

(5) 情報サービス委員会

- ・学会のHPは, 一方的に情報を発信するシステムでよく, 会員同士の情報交換の場にする, HPとして管理が困難になる。

- ・リンクをどのように置くか, どのサイトのリンクを置くか等については当委員会が判断する。

- ・独自のページの創設, 運用にあたって 1) 技術的な制約, 2) 内容と運用に関わる大まかなガイドラインを整備し, これを学会内に広報する。

4 ELR2008 福岡報告

大会実行委員

河口 洋一(九州大学工学研究院)

1) はじめに

ELR2008 福岡は, 2008年9月20日~23日の3日間にわたって, 福岡大学を会場として行われた。ELRの由来は, 応用生態工学会(Ecology and Civil Engineering Society)のE, 日本景観生態学会(Japan Association for Landscape Ecology)

のL, そして日本緑化工学会(The Japanese Society of Revegetation Technology)のRと, 三学会の頭文字をとって名付けられた。三学会合同大会の開催は初めてのことで, その趣旨は以下のとおりである。

三学会はいずれも「健全な生態系の持続・修復を視野にいたした国土のプランニング」を学会・行政・市民の連携のもとに進めようとする, 国内有数の応用系学会です。この三学会はこれまで, 互いに得意とする異なった場を主要なサイトとして研究をおこなってきましたが, 「森・川・海」といわれるように地球上のすべての生態系はつながっており, つながりのなかでしか有効な目標設定と課題達成がおこなえないことは自明の理であります。各学会で学会間連携の動きがほぼ同時的・自律的にわきあがったいま, その実現の第一歩としてELR2008 福岡を開催するものです。

本稿では, 大会運営に当たった実行委員を代表し, 島谷幸宏実行委員長(九州大学, 応用生態工学会所属)らとともに運営に関わった筆者が, 三学会合同大会の開催内容について報告します。

2) 研究発表会

本大会の総参加者は552名, 発表は252件, 懇親会参加者は229名, 公開シンポジウム参加者は約300名(一般市民含む)であり, 盛況であった。

本大会では, 講演申込み時のタイトルと簡単な要旨に応じてプログラム編成がなされ, 口頭発表で16のセッションが, ポスター発表で23のセッションが設定された。スケジュールと場所の制約から, 口頭発表は3会場で2日間83件の発表が, ポスター発表は2日間で169件の発表が行われた。今回は三学会合同ということもあり, 各学会が相互に交流できるよう, プログラム編成においては幅広いセッションタイトルが設けられた。口頭発表そしてポスター発表の会場では, 熱気を帯びた議論が見られた(写真1, 2)。

応用生態工学会は主に河川をはじめとする水域を対象フィールドとした発表が多く, 景観生態学会では森林や植生を対象にGISを用いた発表が, そして緑化工学会は多様な環境における緑化技術の開発や評価に関する発表が多かった。各学会の特色ある発表を一度に聞くことができ, 参加者からは, 異なる分野の発表が聞けたことに対し好意的な意見を数多くいただいた。



写真1 口頭発表会場



写真2 ポスター発表会場

懇親会では、各学会で選出されたポスター賞の表彰(写真3)が行われた。下記はポスター賞の受賞者一覧で、受賞した発表はどれも研究の質が高く、発表タイトルをみるだけでも、各学会の特徴や三学会合同大会ならではの内容の幅広さが感じられる。

日本緑化工学会ポスター賞

- P1-6-20 学校プール周囲の植生がトンボ幼虫群集に及ぼす影響に関する操作実験
○森川政人(千葉大院・園芸), 勝野武彦(日大・生物資源科学), 小林達明(千葉大院・園芸)
- P1-7-5 公園に敷き均された剪定屑チップ材の分解特性と土壌の化学的性質の変化
○佃千尋(千葉大院・園芸), 加藤陽子(千葉大・園芸), 高橋輝昌, 小林達明(千葉大院・園芸)
- P2-6-15 イヌケホシダの潜在分布域と気候変化シナリオに基づく分布変化の予測
○堀川真弘(森林総研), 村上健太郎(きしわだ自然資料館)・津山幾太郎(森林総研)・大藪崇司(兵庫県立淡路景観園芸学校)・松井哲哉(森林総研)・森本幸裕(京大院・地球環境学堂)・田中信行(森林総研)
- P2-7-1 京都市におけるコケ植物外来種; *Tortula pagorum* (Milde) De Not.の生育分布に関する研究
○大石善隆(京大院・地球環境学堂), 村上健太郎(きしわだ自然資料館), 森本幸裕(京大院・地球環境学堂)

日本景観生態学会ポスター賞

- P1-6-26 ジンリョウユリ個体群の構造と光環境
○源典子, 鎌田祐輝, 鎌田磨人(徳島大・工)
- P1-7-2 農地帯の森林における樹洞木の分布およびエゾモモンガによる冬期のねぐら利用
○勝又聖乃, 赤坂卓美, 中村太士(北大・農)
- P2-6-34 環境学習を目的とした環境デザインと子どもの行動に関する研究
○大石悠乃(九州工大院・工)・伊東啓太郎(九州工大・工)・真鍋徹(北九州市自然史・歴史博)・藤原勝紀(放送大学京都教育セ)
- P2-7-14 全国レベルでの流域区分に基づく景観構造の把握
○増澤直, 伊勢紀, 濱野繕彰((株)地域環境計画)

応用生態工学会ポスター賞

- P1-6-5 河床底質の違いによる繁殖期トウヨシノボリ子の産卵床選択に与える影響
○奥田千賀子(名大・工), 小野田幸生(京大・生態研)
- P1-7-42 栄養塩フラックスの生態的コントロールによる富栄養化防止対策
○井芹寧(西日本技術開発)
- P2-6-19 マイクロサテライトマーカを用いた塩生植物の遺伝的多様性評価: (2)宍道湖・中海におけるオオクグ(*Carex rugulosa*)個体群
○大林夏湖・程木義邦・國井秀伸(島根大・汽水域研究セ)
- P2-7-12 河川改修に伴う魚類群集とその生息場の時空間変動 —リバー・ランドスケープ・ユニットに着目して—
○永山滋也, 中村太士(北大院・農)



写真3 ポスター賞・表彰式

3) 企業展示と研究集会・自由集会

研究発表が行われた20日, 21日には、企業等展示(6件)や研究集会・自由集会(5件)も開催された。筆者の属する応用生態工学会では、例年の大会でこのような企画はないため、興味をもって企業展示を見たり、集会に参加することができた。景観生態学会では「比較景観生態学手法にもとづく里山評価システムの開発」が、緑化工学会

からは「緑化植物の取り扱いについての新しい動き」、「法面の自然回復緑化の現場をとりまく課題と今後の展望(Ⅱ)－これからの植生工の検査基準を考える」、「緑と人の健康とのかかわり ～みどり(植物)とのかかわりはなぜ健康によいか?～」の3つが、応用生態工学若手の会からは「若手研究者は環境保全事業にどの様に関わっていくべきか?」といった内容で集会在が企画され、18:00～20:00 という遅い時間帯にも関わらず、多くの人々が集会に参加していた。筆者も企画に加わった応用生態工学若手の会の自由集会では、比較的若い人の参加が多く見られ、研究者、民間、個人といった異なる立場の演者が具体的な事例を挙げて環境保全事業への関わり方や、現在考えていることを発表し、質疑も盛んに行われた。応用生態工学会では一般公募で企画する集会はないため、今回の研究集会・自由集会の時間はとても新鮮に感じられた。また、別の集会に参加した人からは、他の学会が企画した集会にも参加したかったが、同じ時間帯に一度に開かれていたため参加できず残念だった、といったコメントもいただいた。この点については次に合同大会が企画される際の課題となるだろう。

4) 公開シンポジウム「自然再生の課題と展望」

公開シンポジウムは、三学会の共通課題である自然再生をテーマに、各学会から3つの基調講演がおこなわれ、引き続き環境哲学や社会的な合意形成が専門である桑子敏雄氏(東京工業大学)から「自然再生の社会的課題」についてお話いただいた。その後、それぞれの学会の副会長や幹事長、島谷実行委員長、桑子氏によるパネルディスカッションとなった(写真4)。



写真4 公開シンポジウムのパネルディスカッション

緑化工学会の柴田昌三氏(京都大学)による「竹林を通してみる里山再生に関する試み」では、竹と人の関わり方の変化によって現在の竹林問題が引き起こされていることが示された。印象的だったのは、人間が竹をほったらかしにすることで竹林が荒れ出すことを、人間側はよく理解する必要があるという部分である。このようなことを理解した上で、竹を資源として再評価していきたいという柴田氏の主張は、里山再生のきっかけとなる可能性が感じられ興味深かった。二つめの発表は、応用生態工学会の関島恒夫氏(新潟大学)が「トキの野生復帰を実現可能にする自然再生の手続き」について話された。トキ放鳥に関する課題として、システムティックなそして多角的な自然再生計画がないこと、さらに関係者間の合意形成には課題が多いという現状が説明された。その上で、関島氏の関わっているプロジェクトでは、トキの島再生にむけた自然再生を考えていく上で、景観レベルでの再生と局所的な再生の両方のアプローチを組み立てていて、国内でも例がないアプローチによる自然再生シナリオの作成は魅力的なものと感じた。三つ目の発表は、景観生態学会の山根正伸氏(神奈川県)による「丹沢山系における自然再生の試みと課題」だった。2つの発表がおもに種を対象とした話だったのに対し、ここでは丹沢という場所における自然再生の実施状況と課題についての発表だった。印象的なのは、丹沢での取り組みの成果を報告書作成でなく政策提言にするという話で、その手法としてはGISをつかい自然劣化を診断そして現状をふまえた処方箋の作りかたを示していたことであった。また、最後に話された丹沢の大きな課題である自然再生の仕組みの持続については、自然再生は非常に長期の時間を要するため、県や関係者が飽きないで、人や資金や物を持続的に入れられるのかということが話され、大きな課題として参加者全体に認識されたように思われた。

三学会の自然再生に関する発表では、自然再生における人の関わり方についての課題が示されたように感じた。その後発表された桑子氏の「自然再生の社会的課題」は、まさにその部分に関連する内容だったため、多くの参加者は桑子氏の話に熱心に聞いていた。先に話された関島氏の発表が、トキ野生復帰における自然科学からの話であるのに対し、桑子氏の発表はトキと社会に関する発表

で、自然再生の社会的課題が具体的に説明されていた。自然と人の関わり方のうつりかわりを理解すること、地域社会の歴史や空間の履歴を読み解くことの重要性が指摘され、筆者自身興味深く聞くことができた。

その後のパネルディスカッションでは、桑子氏による「自然保護」と「自然再生」の考え方の違いについての話を皮切りに、各学会の代表者3名（緑化工学会副会長・小林達明氏、景観生態学会幹事長・鎌田磨人氏、応用生態工学会幹事長・江崎保男氏）が自然再生の課題と展望について意見を述べられた。会場からの声も含め、幾つか記憶にのこる言葉をあげると、「プロセスデザイン」、「キャパシティービルディング」、「意見の違いは資源である」、「資源と人のマッピングのオーバーレイ」、「ネイチャーは自然にあらず」、「組織のスリム化」等々、自然再生を考える上で重要なキーワードが多面的に聞かれた。特に、クイーンズランド大学名誉教授である橋川氏によるキャパシティービルディングの話は、筆者にとって新しい考え方で興味をもつ話だった。キャパシティービルディングとは、ある地域の自然再生において技術的にも経済的にも持続性のある体制を整えるためのキャパシティー、つまりローカルなキャパシティーをつくることである。そのためには、合意形成をしたらパートナーシップをつくり、譲歩すべきことは譲歩するという体制を整える必要があるというのは、とても重要な考え方だと感じた。「キャパシティービルディングまで含めた形での自然再生事業というような概念を展開していく必要があるし、それを概念化して、またそういう形での研究展開も必要なんだろう」という島谷実行委員長のコメントで、公開シンポジウムは終了した。自然系そして文化系の研究者が入り交った自然再生事業や研究活動は、今後ますます発展していくと感じられた。

5) エクスカーション（日帰りと宿泊）

公開シンポジウムの後、自然再生の現地見学としてエクスカーションが企画された。行き先は、大会委員長である島谷幸宏氏（九州大学）が前職である国土交通省武雄河川事務所の所長時に関わられた自然再生事業・アザメの瀬と石井樋を見学して福岡空港に帰る日帰りコースと、さらに武雄温泉に一泊して六角川の河口堰や有明海に面した

住之江公園、干潟よか公園を見学し、最後に実行委員の伊東啓太郎氏（九州工業大学）が関わられている福岡市内の壱岐南小学校の学校ビオトープを見学する宿泊コースの2コースが企画された。九州以外からの参加者が多いと予想されたため、九州を代表する自然再生の現場の視察と、有明海の「潟」にみられるような特異な自然環境も是非見ていただこうという、少し欲張りな企画となった。バスの中でお弁当を食べ、移動するといった慌ただしいスケジュールであったが、日帰りコースの参加者は51名、宿泊コースの参加者は38名であった。

佐賀県唐津市にそそぐ一級河川の松浦川、その中流部につくられたアザメの瀬では、武雄河川事務所の職員と島谷幸宏氏によるアザメの瀬・自然再生事業の経緯や氾濫原湿地の再生手法、地域住民との合意形成などについて説明があり（写真5）、その後、参加者はアザメの瀬を自由に見学した。



写真5 エクスカーションでアザメの瀬を説明する島谷実行委員長と武雄河川事務所・泊建設専門官

アザメの瀬は「河川の氾濫原的湿地の再生」と「人と生物のふれあいの再生」を目標とした自然再生事業によって創造された約6haに及ぶ湿地帯で、現在は氾濫原湿地の環境に依存する生物の生息・産卵場として機能する一方、地域住民らによる子ども達的环境学習の場としても利用されている。現地見学では、アザメの瀬をフィールドにしている九州大学の院生による二枚貝の説明があり、殻長が15センチもある大きなマルドブガイを見た参加者からは、驚きの声が聞かれた。アザメの瀬を耳にすることはあっても、実際に現場を見たことがある人は少ないようで、参加者からは思っていたよりも規模が大きい、あるいは景色によく

馴染んでいるといったコメントが聞かれた。

次に訪れた石井樋は、佐賀の偉人といわれる成富兵庫重安によって嘉瀬川と多布施川の分流点に約400年前につくられた水利施設で、佐賀の城下町への飲料水や灌漑用水の供給用水路、そして流域の水害を防ぐ機能を併せ持っていた。一時使われなくなり埋没していたが、かつての姿のみならず機能の復元にも成功し、現在は公園として整備されている。ここでは、まず石井樋館で石井樋の独特な構造について説明を受け、その後現地を視察した。嘉瀬川から取水する部分には「象の鼻・天狗の鼻」とよばれる石積み構造があり、平水時そして出水時も極力水だけを取水して砂は入ってこないような構造になっている。初めて見る形状の構造物や、成富兵庫重安の卓越した利水・治水のアイデアに、参加者は熱心に見学していた。日帰りエクスカージョンの参加者はその後福岡空港にもどり、宿泊エクスカージョンの参加者は武雄温泉で一泊し、懇親会を通じて参加者同士の親交が深められた。

翌日は、六角川沿いに有明海まで移動し、有明海にそそぐ低平地河川で潮の満ち引きによって形成される干潟や、そこに生息するムツゴロウやシチメンソウといった有明海特有の生き物を住之江公園や干潟よか公園で観察した。参加者の多くは、初めて見る有明海の干潟や生き物を熱心に見学していた。最後に訪れた壱岐南小学校では、伊東啓太郎氏と一緒に学校ビオトープをつくっている小学校の先生から、学校ビオトープについて説明いただいた。この学校ビオトープは、子どもや先生、大学、地域が設計段階から関わり、現在も成長し続ける、九州の小学校の中で最大規模の学校ビオトープで、最近では外来の植物もビオトープに入ってきており、子供や先生、研究者がその扱いについて議論して決めているなど、とても興味深い話が聞けた。また、子供達がとても生き生きと楽しそうにビオトープで過ごし、独自の遊び方を編み出すといった話はとても印象的でした。

慌ただしいスケジュールでのエクスカージョンでしたが、複数の場所を訪れ、他学会の会員との親睦も深めることができ、実に有意義な時間を過ごすことができた。準備は大変だが、次回の合同大会でもエクスカージョンを継続していただければと思う。

6) おわりに

今回の合同大会は、例年三学会が個別開催する大会とは多くの事が異なっていたため、学会案内や手続きといった準備そして運営に関しては不慣れな点が多く、参加者各位には行き届かなかったことも多々あったと思われませんが、ご容赦いただければと思います。合同大会では参加者にアンケートをお願いし、その結果をまとめると、概ね合同大会は意義のあるものと受けとめた参加者が多かったことは、実行委員として嬉しい限りでした。

会場となった福岡大学との膨大な調整だけでなく、大会期間中も研究室総出で協力頂いた福岡大学山崎教授と研究室の皆様には、この場を借りて深く御礼を申し上げます。

【本稿は、「河川」((社)日本河川協会)に寄稿した報告を協会の許可を戴き一部変更して再掲したものです。:事務局】

5 行事報告

1) 2008 札幌セミナー報告

応用生態工学会札幌 岩瀬晴夫

2008(H20)年8月26日(火)に実施した応用生態工学会札幌セミナーは、すこししやすい天気にもぐまれ、屋外で実施した午前の模型実験も順調にすすみました。午後の室内でのセミナーも予定の時間どおりの進行して一日のセミナーが終了しました。事前・当日の参加申込み数は、総数199名(うち女性16名)、午前の部(水路実験見学)の参加者は169名、午後の部(室内でも講演)の参加者は174名でした。

1-1) 午前の水路実験

午前は山本太郎さんの司会で、三部構成の模型水路実験を行いました。9時の受付後、最初の実験は、(独法)土木研究所寒地土木研究所の高速循環水路です。実験の水路(水路長25m、幅1m、深さ1.2m)は、土砂混じり濁水を最大流速4m/sec、流量1m³/secを循環させることができるポンプ3基を備えた施設で実施しました。高橋一浩総括主任研究員と島田友典研究員の説明で、水路内に敷き詰めた十勝川(北海道帯広)の堤防で使用されている現地の材料(こぶし大の礫混じり砂質土)が、流水でどのように洗い流されるか、が観察できました。こぶし大の礫も流されはじめると、底部を掃流状態で流下するだけでなく、跳ね上がり転動しながら流下することが一目瞭然。その迫力に会場は声ナシ。



写真1-1 寒地土研の水路実験

次の実験は、寒地土研敷地内を100mくらい160名以上の大集団が移動し、三つの長テーブル上に別れて置かれた、出前実験の始まりです。説明されるのは、三年連続セミナーに参加していただいている池田宏講師。池田講師はつくば市の自宅から、ワゴン車に実験道具一式を積み、フェリーで移動しての参加です。前日、1時間くらいの準備だけで当日の本番に望まれました。この簡便さで本質が見てわかる、これが出前実験のよさのようです。本質助手は池田美佐子さんと柚洞一央さんの両名です。紙芝居も使いながら、簡便かつ洗練された数種類の実験が数種類繰り広げられ、ロックコントロール(岩による河川地形の制約)とデブリコントロール(岩屑、礫による河川地形の制約)を説明されました。池田講師は筑波大学を退職された平成18年から出前実験をはじめ、小学生から大人までの広い年代に出前実験を通じて、地形・地質そして地理という自然の不思議さを伝えています。今回の参加者はプロの方達ですが、池田講師の話芸ともいえる舞台進行に参加者の耳目が集中していました。参加者の「河川地形を見る眼」の養成が池田講師の狙いで、それは達したように見えました。



写真1-2 池田宏講師の出前実験

最後の実験は寒地土研の敷地内を貫流する精進川の河道内で実施した川をつかった実験です。説明は岩瀬がおこない、実験助手は成田和男さん、野村圭司さん、渡辺恵三さんの三名です。前日に単管で精進川落差工の上部にコンクリートの型枠につかう合板のパネル(通称コンパネ)で樋をつくりました。樋の底には白いカラートタンを貼り付け、10センチ四方の目印を記入して、土砂の堆積がわかるようにしました。1/100の勾配を付けて単管足場の上に架けた実験水路(長7m、幅0.4m、深さ0.2m)の完成です。樋の中に、流速1m/sec、流量0.03m³/sec程度の流れを起し、市販されている砂利(0~30mm)を上流から流下させると、すべての砂利がコロコロと流れ去りました。これで準備はできました。流れ去る砂利を、効率よく堆積させる横工タイプを探るのが実験の目的です。透過性と不透過性の材質、横工の形状を変えて砂利の堆積形状を観察してもらいました。

1-2) 午後の講演

午後の講演では、札幌の事務を担当している千葉南が全体進行役をつとめ、(独法)土木研究所寒地土木研究所の吉井厚志寒地水圏研究グループの司会で、講演五題と質疑応答がおこなわれました。

最初の講演は、長谷川和義講師(元北大大学院)の「“水路実験の結果をどう使うか”のために」です。午前の水理模型実験を受けて、実物での現象を模型再現する場合の基礎的な次元解析の話(π定理)や相似模型や縦横縮尺を変えたひずみ模型の話、模型の固定床や移動床の話をしていただきました。午前に見たいろいろな模型実験に通底する、力学の世界とその応用について説き起こしてくれました。実物や模型実験でくりひろげられる見掛け上の現象を正しく理解するための、力学の知識と理解の重要性が強調されました。

次は松田芳夫講師(元(財)リバーフロント整備センター)の「“多自然型川づくり”通達の頃を振り返って」と題した講演です。河川行政が自然環境問題に揺れ動いた1980年代の長良川河口堰から説き起こし、1987年(昭和62)年にはじまった河川環境の施策(河川環境管理計画の推進、ふるさとの川モデル事業、(財)リバーフロント整備センターの設立)、そして同年ドイツ圏から入ってきた革新的な近自然河川工法の話が提供されました。「時

代の変わり目にしかるべき人材がでるものだ」という感慨を持って関正和さん(旧建設省, 多自然型川づくり通達の推進者, 46歳逝去)を取り上げ, 川づくりのパラダイムシフトといっても過言でない「多自然型川づくりの推進について」という通達(1990)に話がおよびました。最後に, 日本の風土に根ざした川づくりの確立が今後の課題であると, 講演をいたしました。

三番目は勢田昌功講師(国交省河川局環境課河川環境保全調整官)の「型をとった“多自然川づくり”基本方針に至る経緯」です。話題は大きく二つに分かれ, 一つは「多自然型川づくり」から「多自然川づくり」に至った背景, 二つ目は今年の3月に国交省から関係機関に出された「中小河川に関する河道計画の技術基準について」が策定された背景です。前者は多自然型川づくりから15年経過を機におこなわれたレビュー委員会の報告を下地にした川づくりの課題でした。後者では課題克服の一つとして, 最低のマニュアルが必要との判断のもと, 川幅を重視した新しい河道計画の技術基準を決めた, そのあらましの説明がありました。

四番目は吉村伸一講師(榊吉村伸一流域計画室代表)による「“多自然川づくり”のポイント」です。前記のレビュー委員会提言(2006・5)と「多自然川づくり基本指針」(2006・10)をうけて, (財)リバーフロント整備センター内に「多自然川づくり研究会」が設けられました。「多自然川づくり研究会」は, 現場にかかわる技術者むけのポイントブックを編集・発行に至り, 吉村伸一講師は研究会メンバーの一人です。ポイントブックⅡ(2008年8月)の発行直後でしたので, 吉村講師の講演内容はポイントブックⅡにそったものでした。この本の巻末にある「中小河川に関する河道計画の技術基準」(平成20年3月, 国交省河川局からの通知)の主旨をまじえながら, 現地地形と景観に配慮した川づくりの勘所を熱く説かれました。

最後の5番目は中村太士講師(北大院)です。講演テーマは「多自然川づくりを可能にする計画と技術」です。中村講師は「川の環境目標を考える～川の健康診断～」(河川環境目標検討委員会, 技報堂, 2008年7月)の監修者です。一ヶ月前に発行されたこの監修本の内容にそって講演がはじまりました。川を改変する場合, まず目標を立てること。その目標は川の健康診断が必須であり, 診断は集団検診と精密検査の段階を経ることで,

有効な技術につなげることができると, 後半は技術に着目し, 知床世界遺産で実施した横断工作物の改良技術とその効果, 標津川での倒木導入技術とその効果の検証が話題提供されました。川の診断(検診と検査)から治療方法(技術)まで, 学術成果を踏まえた講演でした。



写真1-3 室内での質疑応答

休憩を挟んで, 質疑応答が始まりました。そこで, 私に強い印象を残した話題を二つ紹介します。一つは, ヨーロッパ発祥の「近自然河川工法」と日本発信の「多自然(型)川づくり」の違いについてです。池田宏講師は川づくりの違いを, 岩質と気候・地形の違いから説明されました。ヨーロッパのトンネルは素掘りが多く, 岩質は乾いて堅固であるが, 日本では湿っぽい岩質で脆弱な岩が多いと。池田宏講師の持論である, 「川の地形」(地形を見る目, 古今書院, 2001年1月)形成のコントロール要因は, ロック(岩), デブリ(礫), バイオ(生物)の三つ。三つの要因は, 乾燥地帯と湿潤地帯では大きく作用力が違うので, できあがる川の地形も違う。ゆえに河川工法, 川づくりの作法は違って当然, という話の帰結でした(と私は理解しました)。

もう一つは, 池田宏講師の出前実験でこの件を実証された, 混合砂礫の流下過程でおこる大石の移動メカニズムについてです。混合砂礫が土砂移動するとき, 大石も移動しやすく, その大石は土砂移動層の上部で移動するが, それはなぜか? 池田講師は, 筑波大時代に大型実験水路で発見された混合効果で説明されました。長谷川和義講師は, 米(小さな砂礫)と大豆(大石)の例で補足説明されました。米と大豆の混合物をゆすると, 米(小さな砂礫)は下方に, 大豆(大石)は上方に移動しやすい(大石は, 小さな砂礫の移動層に乗ったような状

態になり、動きやすくなる)。このような現象をパークレーションという、と。

質疑応答も予定時間内におさまり、本セミナー全体がスムーズな進行で終わりました。進行された司会者をはじめスタッフの皆様、ご協力ありがとうございました。とくに、室内会場と懇親会場のセットで、急遽かりだされた寒地土木研究所所員の皆様に感謝申し上げます。

以上、報告を終わります。

2) 第6回日韓河川生態セミナー

「どのようにして洪水調節とともに河川のハビタットを最大化させるのか？」参加報告
大杉 奉功 ((財)ダム水源地環境整備センター)
田渕 昌之 ((財)リバーフロント整備センター)

2-1) はじめに

日韓河川生態セミナー (Annual Joint Seminar between Korea and Japan on Ecology and Civil Engineering) は日本と韓国における河川工学や生態学の研究者・技術者の関係を築き上げることを目的とし、両国における河川レストレーションに関する考え、知識、経験を交換する場として2003年に徳島で始まったものです。その後日本と韓国で毎年交互に開催され、今年は8月18日から19日にかけて韓国の晋州国立大学 (JINJU NATIONAL UNIVERSITY) にて第6回目が開催されました。今回のセミナーは「どのようにして洪水調節とともに河川のハビタットを最大化させるのか」というテーマに沿って韓国河川再生研究会と晋州大学が主催となって行われました。



写真2-1 晋州国立大学 会場

今回は18日のセミナー、19日の現地見学会に参加する機会がありましたので報告を行います。

○主な講演者：辻本哲郎 (名古屋大学教授)、鎌田磨人 (徳島大学教授)、竹門康弘 (京都大学

准教授)、Hyoseop WOO (韓国建設技術研究院)、Tae Soo CHUN (釜山大学教授) など

○日時：平成20年8月18日～19日

○会場：晋州国立大学、19日は現地見学会

2-2) 研究発表会と総合討論

18日は研究発表会と総合討論が行われました。今回のセミナーは「どのようにして洪水調節とともに河川のハビタットを最大化させるのか？」

(Restoration of stream and wetland in urban areas: How can we maximize riverine habitat within the restriction of flood control? Principles and Case Studies) というテーマが設定され、基調講演として韓国から「ベントス群集の生態学の統合的な展望について」(釜山大学 Tae Soo CHUN 教授)、日本から「河川生態の管理にむけた学際および国家間における協働に係わる10年間の発展について」(名古屋大学辻本哲郎教授)の2題のスピーチが行われました。その後9件の口頭発表(日本4件、韓国5件)と19件のポスター発表(日本5件、韓国14件)が行われました。

口頭発表では、ダム建設後の物理環境と生息環境の変化を紹介し、対策としてフラッシュ放流によるダム下流の環境改善を実施した事例の発表が日韓からありました。韓国からは Daecheong ダム、日本からは三春ダムの取り組みが紹介されました。また河川生態系の評価手法として、韓国から魚類相を用いた評価手法や、日本から民間伝承『カッパ』に基づく水辺の環境の分類法に関する研究ではカッパを指標として水辺環境の評価手法に関する研究が発表されました。交互砂州の堆積に係わる研究では上流からの土砂供給と交互砂州の形成について、実験結果を交えながらの研究発表が行われました。

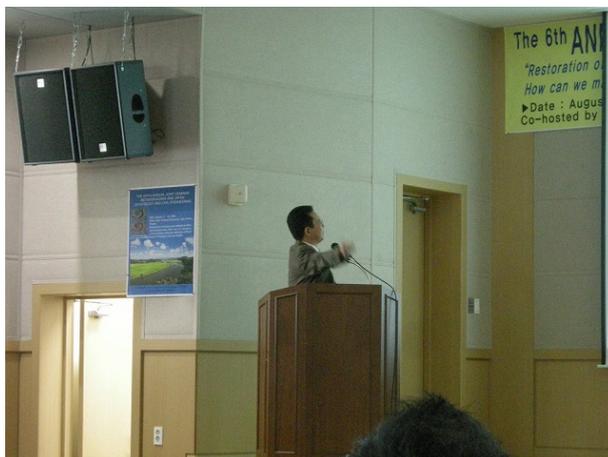


写真2-2 口頭発表の様子

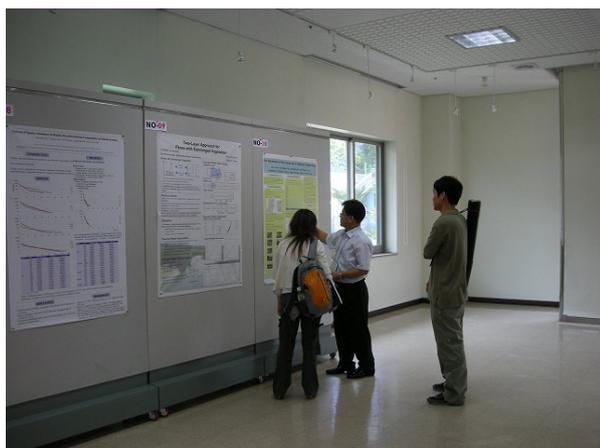


写真2-3 ポスター発表の様子

他にも、韓国における多自然型高水護岸の工法の紹介や、淀川流域における浮遊粒状有機物(S-POM)の流下に係わる研究など数多くの研究成果が発表され、様々な分野の研究者から活発な質疑応答および意見交換が行われました。

総合討論ではこれまでの日韓河川生態セミナーの成果の総括や今後の進め方について議論が行われました。まずこれまでの総括を行い、その成果について、これまで第6回までのセミナーの内容と代表的な研究について、応用生態工学会の国際誌であるLEE (Landscape and Ecological Engineering) に特集を組んで発表する方向となりました。また今後の進め方としては、さらに多くの参加者を集めるにあたって、セミナーのテーマを若手の参加者がより魅力を感じるテーマに工夫することや、日韓合同研究の企画などが議論され、今後もこの日韓合同のセミナーを継続していくことの重要性が確認されました。



写真2-4 総合討論

2-3) 現地見学会

19日は晋州市周辺や南江の自然再生事業の現地見学会が開催されました。まず市近郊の南江支川の合流点処理の改善事業を見学しました。

まず、支川上流域の洪水対策として、本川との合流部に導流堤を設置する工事の事例を見学しました。これは晋州市の事業として実施され、導流堤の表面は巨石により構成されていました。また、本川の堤防は蛇籠による護岸が施されるとともに、堤防表面を元の表土を用いて被覆する工夫がなされていました。



写真2-5 設置された水制と導流堤(最も奥側)

次に人工ワンドの設置例を見学しました。河川近傍の湿性水田を遊水池的に活用するために、人口ワンドとして整備した事例です。下流部で本川と繋がっており、上流からは洪水時でも直接洪水流が流れ込まないように配慮した構造となっているそうです。整備後に、ワンド内の魚類相等のモニタリング調査が行われており、コイ科魚類やカムルチー、ナマズ等の在来魚が確認されています。また、オオクチバスも確認されており、韓国でも日本同様の外来魚問題が顕在化していることが伺われました。

晋州市の上流約10kmの地点に、南河ダムという多目的ダムと放水路が1969年に設置されています。このダムと放水路によって、100年に1度の洪水が発生した時に流入する流量10,400m³/sに対し、放水路ゲートを用いて直接近傍の海に放流することで8,400m³/sの洪水調節を行い、ダムから下流へ放流する流量を2,000m³/sとする計画でダムが建設されました。

その後1996年にダムの嵩上げ工事を行い、利水容量とともに治水容量を増大させ、ダムから下流へ放流する流量を800m³/sまで低減させることが可能となりました。



写真2-6 人工ワンド



写真2-9 南河ダム 放流口



写真2-7 ワンドで確認されたコウライモロコの仲間



写真2-10 南河ダム 放水路ゲート



写真2-8 南河ダム堤体

この南河ダムの治水機能向上により、晋州市内を流れる南河の河川敷に余裕が出来、この余裕を使って河川敷を利活用するための親水工事と河川の自然を取り戻すための自然再生事業が行われました。

南河ダムでは、日本では絶滅してしまったカワウソが、ダム貯水池に生息しており、ダム堤体を通してダム下流にエサの魚を取りに行くのが目撃されているそうです。



写真2-11 南河 高水敷に設置された遊歩道



写真2-12 南河 多自然護岸(ヤナギ植付け)



写真2-13 南河 多自然型に工事された水辺

自然再生という言葉は日本でも韓国でもよく使われています。しかし、具体像としてどんな自然環境を再生するのか、目標とする理想像どうやって定めるのか、については韓国においても苦労していることが実感できました。

今回は韓国の川を初めて見る機会を得ました。日本の川と似ているところも多くあり、郊外の風景は日本のそれと間違えそうになるほど地形的・文化的な共通項を見出すことができます。日本と韓国が協働でできることが数多くあると実感することができました。

謝辞：

今回の日韓セミナー開催にあたり、ホスト役を務められた韓国建設技術研究院の Hyoseop WOO 先生、釜山大学 Tae Soo CHUN を初めとする韓国の方々、また日本側の名古屋大学の辻本哲郎先生、京都大学の竹門康弘先生、徳島大学の鎌田磨人先生、他参加メンバーや関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

3) ICHE2008Nagoya 報告

名古屋大学田代喬

3-1) はじめに

2008年9月8日から12日にかけて、第8回水科学・水工学に関する国際会議(The 8th International Conference on Hydro-Science and -Engineering: ICHE2008)が名古屋大学IB電子情報館で行われた。8日の事前登録受付に引き続き、9～11日には、基調講演、研究発表等を含むテクニカル・プログラム、12日にはエクスカーションとして、Technical Visitと称するバスツアーが実施された。会議を通じて、28カ国から315人(うち半分は日本)の方々に参加いただくことができた。

本会議は、本学会を始めとする国内外関係9機関の協賛と国内4機関による助成を得て(下記「協賛機関一覧」・「助成制度・機関一覧」参照)、国際水工学会(International Association of Hydraulic Engineering and Research: IAHR)と名古屋流域圏水理研究院(Nagoya Hydraulics Research Institute for River Basin Management, Department of Civil Engineering, Nagoya University: NHRI)との共催(実行委員長:辻本哲郎本学会副会長、名古屋大学教授)で行われた。ICHEは、1993年6月にワシントンDC(アメリカ)で開催されたのを皮切りに、1995年北京(中国)、1998年コトブス・ベルリン(ドイツ)、2000年ソウル(韓国)、2002年ワルシャワ(ポーランド)、2004年ブリスベン(オーストラリア)、2006年フィラデルフィア(アメリカ)を経て、今回の名古屋での開催となった。

本会議の開催に当たっては、協賛いただいた当学会の関係各位(応用生態工学会名古屋の委員諸氏)にも多大なる協力をいただいた。本稿では、運営側の視点を交え、応用生態工学会と関連する内容を中心に会議報告を行う。



写真 3-1 開会式の様子

3-2) 会議の内容

(1) テクニカル・プログラム

本会議では、水科学・水工学における9つのトピック（下記「論文募集テーマ一覧」参照）をテーマとしている。投稿された論文は、論文集編集委員会のピアレビューによる採否を経て、最終的には口頭で225件、ポスターで46件の発表が実現した。これらは、投稿要旨をもとに企画された18のオーガナイズドセッションを含む45の平行セッションに振り分けられている。このオーガナイズドセッションは、開催国の研究者と国外の著名な研究者が協力して企画・運営したもので、本会議の大きな特色である。このほかにも、基調講演5件と著名な研究者による講義形式のクラスルーム3件が企画されるなど（下記「基調講演一覧・クラスルーム一覧」参照）、テクニカル・プログラムを実施した9月9日～11日の3日間、5つの会場とポスター掲示ホールに分かれて、高密度に活発な討議が展開された。

全体的に見れば、ICHEの設立に関わった研究者の専門性に起因して数値流体力学（CFD）に関する発表件数が多かったが、本学会関連では、River Restoration*、Primary Production in Streams*、Benthos and Fish Habitat, Flow with Vegetation*、River Basin Management*といったセッション（*はオーガナイズドセッション）があった。特に、River RestorationではDr. Hyseop WOO (Korean Institute of Civil Engineering Technology, 当日は欠席)、Primary Production in StreamsではProf. Miki HONDZO (University of Minnesota)といった各国の第一人者が、わが国を代表する研究者である渡邊康玄教授（北見工業大学）、本学会幹事でもある萱場祐一博士（（独）土木研究所自然共生研究センター長）とそれぞれコンビを組んでセッションを企画するなど、限られた発表件数ながらハイレベルな議論が行われた。

このほか、土砂水理学の分野で多大な業績を残した、故 Prof. Emeritus Selim YALIN (Queen's University, Canada) を偲ぶ特別セッションも企画された。本セッションについては、別途冊子が発刊される予定であることを付記する。

(2) ソーシャル・プログラム

開催前日（9月8日）には会場ホールでのアイスブレイカー・ファンクション、1日目の夕方に

は名古屋大学内南部食堂でのレセプション、3日目のテクニカル・プログラム終了後には名古屋東急ホテルにおいてバンケットが行われた。いずれも多数の参加者を集め、旧交を温め合う人々、互いに紹介し合う姿など、さまざまな交流がなされたようである。また、会議には直接参加されない同伴者向けにも、会期中の2日間にわたって、名古屋市内および郊外の観光地を巡るバスツアーが企画され、好評を博した。

バンケットは広大なホールにおける着席ビュッフェ形式で、箏が奏でられるなかで和やかに進んだ。会場には、お茶席を体験できるスペースが設けられ、特に国外からの参加者は、予め配布されていた作法ガイドを見ながら、我が国伝統の茶道を楽しんでいる様子が見受けられた。宴たけなわの中、関連する国際会議（River Flow）の紹介に引き続き、ICHE恒例の行事である、次回開催地へのICHE-Flagの受け渡しが滞りなく行われた。なお、今回は2010年にマドラス（インド）での開催とのことである。蛇足だが、本会議の運営・準備に携わったひとりとしては、バンケットが盛況のままに閉幕したのを見て、ようやくにして任を果たすことができたと感じられた。



写真3-2 バンケットでのICHE-Flagの受け渡し
（設立者3名を挟んで名古屋からマドラスへ）

(3) エクスカーション

最終日の Technical Visit は木曾川三派川地区と岐阜市を中核に、木曾川上流エリア（Aコース）と木曾川下流エリア（Bコース）の2グループに分けて実施された。総勢87名でバス3台が用意され、事前のアンケートにより1台はAコース、2台はBコースといった具合に分乗した。Aコースは、木曾川における日本ライン下り、長良川プロ

ムナード、鵜飼屋、アクアトト岐阜、Bコースは、アクアトト岐阜、(独)土木研究所自然共生研究センター、長良川プロムナード、鵜飼屋、長良川河口堰といった行程である。アクアトト岐阜では、普段目にするのことができない「バックヤード」を紹介いただき、岐阜市の長良川沿いでは、先駆的な護岸整備(プロムナード)の説明に引き続き、鵜飼屋においては実際の「ウ」を目にしながら、鵜匠の方から、鵜との付き合いから得た処世訓を交えた説明をいただいた。両コースとも中部・東海地区における伝統文化や河川に関わる先駆的な技術・研究事例に触れていただくことができたものと思われる。各訪問先で対応くださった方々に改めて御礼申し上げたい。

なお、ここでのツアー行程の企画に当たっては、国土交通省中部地方整備局の可児 裕氏を始めとする関係諸氏には多大なるご協力をいただいた。特に、直前のゲリラ豪雨により、当初予定していた徳山ダム見学が実現不可能になったことを含め、直前までさまざまな面で調整いただいたことを紹介し、この場をお借りして改めて感謝申し上げる。



写真3-3 テクニカル・ビジットAでの
日本ライン下り

3-3) おわりに

本会議では、①世界的に高名な研究者を招聘し、基調講演だけでなく、若手研究者や大学院生に向けた講義形式のクラスルームを開催することで魅力を増す一方、②オーガナイズドセッション企画者には各セッションでの発表者への参加呼びかけを行っていただいた。これらのことが奏効してか、とかくキャンセルされる割合が大きくなりがちな国際会議にあって、高い出席率を維持することができたと思われる。

また、エクスカージョンの稿では前述したが、本会議はその他にも、以下の多くの方の参画、協力無しには為し得なかったものである。誌面の都合上、お一人ずつ名前をあげることはできないが、International Organizing Committee, Local Organizing Committee, Program and Editorial Committee, Special Session Organizer, Local Scientific Advisory Committee, International Scientific Committeeのメンバーの方々、応用生態工学会名古屋の関係諸氏にはここに記して、謝意を表す。

記

【協賛機関一覧】

- 応用生態工学会 (Ecology and Civil Engineering Society : ECES)
- 土木学会 (Japan Society of Civil Engineers : JSCE)
- 日本水フォーラム (Japan Water Forum : JWF)
- 中国水利学会 (Chinese Hydraulic Engineering Society : CHES)
- 韓国水資源協会 (Korea Water Resources Association : KWRA)
- カナダ土木学会 (Canadian Society of Civil Engineering : CSCE)
- アメリカ土木学会 (American Society of Civil Engineers : ASCE)
- 世界堆積・侵食研究会議 (World Association for Sedimentation and Erosion Research : WASER)
- ミシシッピ大学数値水科学・水工学センター (National Center for Computational Hydroscience and Engineering, The University of Mississippi : NCCHE)

【助成制度・機関一覧】

- 河川整備基金助成事業 (財団法人河川環境管理財団)
- 国際会議開催助成金交付制度 (財団法人名古屋観光コンベンションビューロー)
- 日本万国博覧会記念基金事業 (独立行政法人日本万国博覧会記念機構)
- 中部建設協会公益事業助成金 (社団法人中部建設協会)

【論文募集テーマ一覧】

- A. COMPUTATIONAL FLUID DYNAMICS : CFD (数値流体力学)
- B. HYDRO METEOROLOGY (水文気象学)
- C. RUNOFF HYDROLOGY AND RIVER MANAGEMENT (流出水文・河川管理)
- D. TURBULENCE MEASUREMENT AND MODELING (乱流計測・モデリング)
- E. MECHANICS OF SEDIMENT TRANSPORT AND FLUVIAL HYDRAULICS (土砂流送機構・移動床の水理)
- F. FLOOD RISK MANAGEMENT (洪水危機管理)

- G. SOIL-WATER-STRUCTURE INTERACTION
(地盤-水構造の相互作用)
- H. ECO-HYDRAULICS AND RIVER RESTORATION (生態水理学と河川の自然復元)
- I. WATER AND RIVER BASIN MANAGEMENT
(水・流域管理)
- J. MARITIME AND COASTAL ENGINEERING
(海洋・海岸工学)

【基調講演一覧】 (題目/講演者) (講演順)

- A Flash Flood Control System Based on the Global Earth Observation Systems
Prof. Toshio KOIKE (University of Tokyo, Japan)
- Unsteady Quasi-Two-Dimensional Flow Analysis of Flood Flows in a River with Vegetation
Prof. Shoji FUKUOKA (Chuo University, Japan)
- A Synopsis of Research on Meandering: State-of-the-Art and Future Challenges
Prof. Ana Maria A. FERRIRA DA SILVA (Queen's University, Canada)
- Turbidity Currents, Revisited
Prof. Walter H. GRAF (École Polytechnique Fédérale de Lausanne, Switzerland)
- Reduced Order Modelling of an Adaptive Mesh Ocean Model
Prof. I. Michael NAVON (Florida State University, U.S.A.)

【クラスルーム一覧】 (題目/講演者)

- A Comparison of Large Meandering Rivers and Huge Meandering Channels in the Bottom of the Ocean: So Close and Yet So Far
Prof. Gary PARKER (University of Minnesota, U.S.A.)
- An Overview of Cohesive Sediment Transport Studies in Some Canadian Rivers
Dr. Bommanna G. KRISHNAPPAN (National Water Research Institute, Canada)
- Flow Regime and the Morphology of Alluvial Channels
Dr. Jaime I. ORDONEZ (National Hydraulics Laboratory, Colombia)

6. これからの行事案内

(1) 応用生態工学会東京第5回勉強会

今回はダム・湖沼に関する話題として、手賀沼の水質(リン)の動態や水草、ダム湖の外来種(オオクチバスの駆除)についてのお話を聴くことを予定しています。

なお、人数確認のため、ご参加いただける方は、お手数ですが、広報担当の西(メール: nis18209@ideacon.co.jp)まで事前に連絡下さい。

〔概要〕

テーマ: ダム・湖沼に関する話題
日時: 平成20年12月12日(金) 18時~(約2時間)
場所: (財)ダム水源地環境整備センター 3F会議室
地図→

<http://www.wec.or.jp/center/map/map.htm>

費用: 無料

話題提供:

- 話題1 手賀沼のリンの動態とその源流域における水草の生態
東京大学大学院新領域創成科学研究科 篠原隆一郎
- 話題2 ダム湖の水位低下操作を利用した外来魚の防除手法の効果
(財)ダム水源地環境整備センター 大杉奉功

(2) <関連行事>

「自然共生研究センター10周年記念研究報告会」

(日時: 場所)

12月18日(木): 名古屋東建会館

12月19日(金): 東京星陵会館

詳細は当学会HP (<http://www.ecesj.com/>)を参照下さい。

7. 編集後記: 事務局から

<今後の予定>

- 12月9日 第36回幹事会, 第44回理事会
(平成20年度活動状況, 平成21年度事業計画等)
- 12月12日 応用生態工学会東京第5回勉強会
- 12月18, 19日 <関連行事>
「自然共生研究センター10周年記念研究報告会」
- 平成21年1月 応用生態工学会東京第6回勉強会
- 平成21年2月 ニュースレター43号発行予定
- 平成21年3月 役員会予定

平成20年も忙しい師走となりました。会員各位におかれましてはご健勝にて益々ご活躍のことお慶び申し上げます。今年の成果を糧として、より良い年を迎えられることを願っております。

(事務局: 奥村興平)

[2008年11月25日現在会員数]

名誉会員	3名	
正会員	1106名	
学会員	123名	合計 1,232名
賛助会員	37法人(57口)	